

# 「釈迦内枢唄」高浜公演を観て

青木新門（「納棺夫日記」著者）



時間はかかる。二時の開演までに間に合うだろうかと思いを飛ばした。

この度水上勉原作の戯曲「釈迦内枢唄」が劇団「希望舞台」によつて富山での公演が決まった。その最初の打ち合わせ会で出会った希望舞台の玉井徳子氏より近々福井の高浜で公演があるが観に来ないかと誘われた。そのとき私は行けたら行きますとあいまいな返事をして、スケジュールにも入れることなく、すっかり忘れてしまつていた。

ところが高浜公演のある十二月二日の朝、突然玉井氏より「来ていただけるのでしようね」と電話があつた。私は受話器を持ったまま一瞬間葉に窮した。しかし次の瞬間「今から出ます」と返事をしてしまつた。

高浜まで高速を走つても四

は過去に何かで読んだ記憶があつた。しかし車を走らせながらどんな内容の作品だつたか思い出そうとしても、昔「隠亡」といわれていた火葬場で働く人を主人公にした戯曲であつたことと、その主人公が秋田弁で物語る文章が読みにくかつたこと、そんな断片的なことしか記憶になく、その作品の内容は思い出せなかつた。

高浜の公演会場に着いたのは開演一分前だつた。席に着くと同時に幕が上がつた。

舞台の進行と共に、原作を読んだ記憶がよみがえつてきた。私が水上氏のこの作品を読んだのは、倒産する前の飲食店を経営していた頃で、来店する客と観念的な文学論を語つていた時期だつた。その頃の私は、水上氏がこの作

品で訴えたかつた悲痛な叫びを聞く耳を持たなかつた。ましてお棺をつくり、土葬の穴掘りをしていた氏の実父をモデルに書かれた作品であることなど知る由もなかつた。そんな父を持ち、その父によつて幼くして寺へ小僧として出された父への怨み、その父を許しまるごと認めたところにこの水上作品が成つていく。

この作品は秋田釈迦内を舞台に、火葬を専業とする家に生まれ、差別を受けて育つた主人公ふじ子が、自分の境遇に苦悩しながらも、父親の真実の心に触れて、苦闘の果てにそれを乗り越えて、火葬の仕事を引き継ぐ決意をするというストーリーである。

私は舞台の進展とともに、私自身がひよんなことから葬式の仕事に携わることになり、やがて死者をお棺に納めるという湯灌・納棺の仕事

を専業としていた頃を思い出していた。親戚から「親族の恥」とののしられ、世間の白い眼を気にしながら、悶々と生きていた。そんな私に真実の世界を指し示してくれたのは死に臨んだ人や死者たちであつ

た。  
人は必ず死ぬのである。そのことを誰もが知つていながら、死を恐れ、忌み嫌い、眼をそむけて生きている。その眼が集まると、やがて差別やいじめを生む社会が形成される。藪内ふじ子が怒り狂い、のたうちまわつた苦闘の道程では、即ち私が歩いた道程でもあつた。

晴れ晴れとした顔で舞台の中央に立つ有馬理恵さんが演ずるふじ子に、明るい光が照射して幕が下りた。私にはその光が、無明の闇に射す無碍の光明のように思えた。涙がとめどなく流れた。拍手が鳴り止まぬ先に会場を出ると、前方に夕陽に光る若狭の海が見えた。

私は観に来てよかつたと、夕陽を背にして帰路へと車を走らせた。

この光に遇うものは  
三垢消滅して身意柔軟なり  
歡喜勇躍にして善心生ず

私はいつの間にか、この大無量寿経の一節を繰り返してぶやきながら、北陸道を走つていた。

## 苦闘の果ての真実の世界

青木新門

現代文明は、死から眼をそむけて生にのみ価値を認めて、それはいかに合理的にシステム化していくか、という考え方で成り立っている。そうした社会にあつては、仏教の説く生死一如の真実や共生の思想など容易に受け入れられない。

死は必然であるにもかかわらず人は死を受け入れようとしない。大概の人は、死を恐れ忌み嫌い、死から眼をそむけて生きている。その眼が集まると、やがて差別やいじめを生む社会が形成される。「釈迦内枢唄」の火葬の仕事を親から引き継いだ娘ふじ子も、そんな世間の白い眼を一身に浴びて苦悩する。しかし怒り狂い、のたうちまわつた末にたどり着いた世界は、無碍の光明の射す真実の世界であつた。それはまた安心の境地でもあつた。藪内ふじ子の苦闘の道程は、私が納棺夫として辿つた道程でもあつた。  
多くの人にぜひ観てもらいたい作品である。

「納棺夫日記」著者